

運輸甚便、但時決壊民田廬、通載船長二丈五尺許、廣六尺許、底平板厚、舳如圭首、

〔筑後地鑑上〕一筑後川、乃是九州之大川也、其源出自豐後、而西南流歷是州生葉、竹野、山本、御井、三瀧、五郡而入海、其廣三町餘、或二町、一町餘、九州稱之曰筑後川、是州舊有千年川及一夜川、見古人和歌、此二川少知者、蓋千歲川此川之總稱、而一夜川則指其一處之名也、

〔西遊雜記六〕筑後川といふは九州第一の大河にて、水元は豊後、日向より流れて、川舟十五里の往来有、川下へ沙さし入て、海舟百石積計の廻舟は入る也、此川を筑後、肥前の堺として、むかしよりも雙方の村々、堤水道の論まゝある所也、近年は別しての事にて、肥前の方より川土手を築上し事數丁にて、夫には瀬の下といふ所の町家凡千餘軒、高水の時にせくべきやうなし、

瀬の下といふは久留米よりわづか八丁川に望て家造りし町場にして、土手をして防ぐべき地所なし、常水にても川端へ遠からずして、高水の節別て難義なる所、肥前のかたに土手を築かれてはいかんともなしがたきやうに見ゆる地理なり、

此故に爭論甚敷なりて、筑後久留米領の百姓、肥前の地に入れば大勢にて打た、きし、肥前の百姓久留米領へ來れば右の如し、既に百姓合戦に及ばんとす、無據聞訴となり、予が此所通行のせつ、御見分として御代官萬年御氏御下向、肥前の國千栗明神の別當寺に御止宿あり、其後いかゝ成し事にや、雙方の百姓勝手つくのみの物語とりべくにて、奇談も有し事なり、爰に略しぬ、

〔佐藤元海九州記行〕抑此筑後河ハ、原ヲ豐後ト日向ノ界ナル深山ヨリ發シ、西北ニ流レテ當國ニ至リ、久留米城ノ西北ノ隅ニ來テ、屈折シテ西ニ流レ、榎津ト云フ所ヨリ西海ニ注グ、是レ九州第一ノ大河ナリ、河舟ノ通行スルコト凡ソ十五六里、河下ノ所ハ潮入ニテ、二百石積ノ船モ通津ス、此河ハ、筑後ト肥前ノ國界ニシテ、若シ大雨ノ降續クコト有レバ、洪水出テ兩岸ニ溢流シ、筑後ノ方ハ高良山ノ下ヨリ、久留米ノ領内大半湖水ノ如クニ成リ、肥前ノ方ハ、直チニ西尾神崎ノ邊ヨ